In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	全体討論のまとめ
Author	西垣, 順子
Citation	大阪市立大学大学教育. 17 巻 2 号, p.52-55.
Issue Date	2020-04-30
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	第 17 回 FD 研究会
DOI	10.24544/ocu.20200622-008

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

■ 第17回FD研究会　全体討論のまとめ

全体討論のまとめ

西　垣　順　子
大学教育研究センター

NISHIGAKI Junko

１．はじめに

本稿は第17回FD研究会における全体討論の文字起し原稿をもとに、当日司会を務めた西垣が議論の内容を取りまとめたものである。本号の前の章で鳥居教授からのコメントを掲載したが、それに対する応答が最初にあり、その後にフロアからの質問への回答があった。

２．金子教授の報告へのコメントについて

【金子】社会貢献活動への学生参加と、e-Learning授業での学生へのフィードバックについて質問をいただいた。小中学生サマーラボは、大阪市立大学と府立大学と高等工専の社会連携部というところからのオファーを受けてやっているものである。学生の参加を少し考えたが、現在指導中の学生を参加させるのはある種の利益相反になりかねないと思うのでやめている。

サイエンスアゴラという東京でやっているイベントにも参加している。そちらには５－６年生の、時間のありそうな学生２人ほどに来てもらっている。最初に来た学生は社会人で医学部に入学した学生だったが、コミュニケーション能力が高く、イベントの２日目にはもうプロの演説師のようになっていた。教育としての効果も高かったと思っている。

e-Learningのフィードバックについては、学生からの反応の状況をリアルタイムで映している。教員３人で登壇している授業だが、最初から組織的にやったわけではなく、もともとは個人的な取組のひとつだった。私が単独でやって、こういうことをしていますよと紹介したら、是非とも組織的にやりましょうという話になった。そのためカリキュラム・ポリシー上の位置づけというほどには重きを置いているわけではない。ただ私の思いとしては、単発の知識を得るのではなく、関連性を持って学ぶほうが良いということだった。

また、あの授業はアクティブ・ラーニングなので、学生の学習がどこに飛んでいくかわからない。例えば肺炎という症例を使うが、細菌学の領域は私が答えられるが、呼吸器の生理学などになると、私のほうではとても正確な知識は教えられない。嘘を教えたらまずいので、呼吸器の先生に来てもらった。３本立ての構成になっていて、最初に症例を出し、その人の状態を生理学的に説明してもらい、次に細菌学的に説明し、最後は治療に持っていくという流れで、３本で、45分ずつで話す。

できるだけ教員はしゃべらないでくださいと伝えているが、教員はしゃべるのが好きでついしゃべり過ぎる。学生は案外と知らないことが多いものなので、どんどん突っ込んでやってくださいと言っている。そうして学生の頭を活性化させることが目的と思っている。

３．荒井講師の報告へのコメントについて

【荒井】学生の学び方の変化だけではなく、教員の側の教え方の変化が学生の行動に影響しているのではないかというコメントと、フォーカスグループを取り込んだ調査もやると良いのではないかというご指摘をいただいた。教員側の変化については、図書館の職員の方からも意見として出ているところである。また、フォーカスグループ的な調査については、自分は参加していなかったが職員の方が学生に来てもらって、聞

き取りをされていたこともある。

【学情センターの職員の方から】今年度は教員向けに、学生がどのように図書館の資料を使っているのか、学生に対してどのように使わせているのか、授業を行う際に学情センターをどの程度利活用してくださっているのかをお尋ねするアンケートを、今まさに実施中である。結果が出てくれば、状況把握の一助になると考えている。学生の利用状況については、今日のご報告とは別のデータを使って、「年間1冊も本を借りなかった学生の比率」を出してみたことがあるが、学部によってその比率が急激に上がっているところもある。その学部や学科の学習スタイルがそうなっているからであり、問題がないというのであれば良いのかもしれないが、「いや、問題だ」という場合に、学情センターはどういったお手伝いができるのかというところが知りたいと思い、昨年の調査や今年の調査をやっている。

学情センター、図書館として、大学の学習、研究にどこまでかかわっていくのか。新大学の図書館構想も出ているが、どの方向を向いていけばいいのかについて、学生さんや先生方に意見を出していただければ、アイデアも出てくるかと思う。職員は図書館大好き人間がそろっているので、何で図書館を使ってくれないのかなと思う。９月の研修期間に入っているが、本当に人が来ない。それなりに資料は用意しているのに、来てくれないのは残念で、「学生選書」などのイベントもやってはいるが、なかなかゲートの中まで入ってきてもらえないというところが悩み。ぜひ何かヒントをいただければなと思う。

４．フロアから荒井講師の報告への質問について

【質問１】そもそも図書館を使うべきだという理由は何か。図書館を使う学生は成績が高いということはあるのか。

【荒井】図書館の利用が減っても、学生の学習の質に影響がなければ良いのではないかというのは、確かにそのとおりだと思う。今回は時間が無くて出せなかったが今後の課題として、アウトプット指標として利用満足度だけではなく、図書館が行ったサービスの成果に対する指標も取り入れていくべきと考えている。図書館の教育が学生の教育にどれだけの影響を及ぼしているのかというのを直接はかるということである。例えば、ミネソタ大学の図書館で行われた、学生の図書館利用の実態とGPAの関係を調査したという研究がある。そこでは「図書館の利用」のカテゴリーとして、図書の貸し出しだけではなく、講習会参加やレファレンスサービスの利用、さらにはデジタルアクセスの統計もとっていて、それぞれをよく利用した学生とあまり利用していない学生で分けて、GPAがどう変化していたかを考察していた。利用者数と貸出数だけで状況を探っていくのは限界があるので、こういう研究をしていく必要がある。

【質問２】図書館を学生が利用する目的は何が多いのか

【荒井】アンケート結果では、資料を使うという学生とスペースを使うという学生の２つに分かれ、概ね40％ずつくらいだった。

【質問３】利用者数が減っているということを比率で出していたが、実数としてはどれくらい減っているのか。入館数に比べると貸出数は変化がないように見える。大学院生と学士課程学生との違いはどうか。

【荒井】2014年のピーク時には、約50万人程度の利用者数があった。細かな数値はパソコンの中に入ってしまっているが、５万、10万といった単位でさがっている。実数に関しては事業年報にも出しているので、そちらでも確認できる。

学部生の貸出数があまり下がっていないというのは確かにそのとおりで、入館者数に関して学部生は大きく下がっているが、１人あたりの貸出数に関しては2008年度基準で考えた場合はさほど下がってない。大学院生は、貸出と入館者数が同じような形で増減を繰り返している。貸出利用をしないで入館していた学部生の利用が減っていると考えている。グループ学習室、ラーニングコモンズなどを使う学部学生は、大学院生に比べて非常に多い。そういうところを利用する学部生のうち、貸出利用をあまりしていなかった学生が、図書館にあまり来なくなったのかと考えられると思う。

５．その他の質問など

５．１．統計に関する相談

【フロアから】実験系では実験で得たデータを分析するのに統計処理をしないといけないが、統計学は自分たちが学生の時に習ったことからかなり進歩して、新しい方法も出てきて困っている人が実は多い。中国から来ていたうちの卒業生が、今は帰国して大学で教員をしている。その人から聞いたのだが、実験計画を組んでデータができたら、どうやって不要なデータを減らすか、どういう方法で検定していけばいいかということを、全部相談する窓口があるらしい。そういうものへのニーズはかなりあると思う。

【荒井】図書館のサービスとして、そういった特殊な能力を持った人、サブジェクト・ライブラリアンみたいな方を置いて、研究の支援まで行うということは海外では行われている。ただ予算に上限がある中で、そういったサービスを行うためのパワーをどこから確保するかという問題になってきてしまう。

【学情センターの職員の方から】サブジェクト・ライブラリアンという考えとは別に、TAさんや院生さんなどで専門的な知識を持った人たちに、いわゆるレファレンスカウンターに集約されるようなレファレンス業務のところに、どうやって参画してもらうかが１つ課題かとは思っている。

５．２．レポート執筆の支援

【金子】医学部の授業で１年生向けの「基礎医学研究推進コース」というのがある。そこで最後にレポートを書かせるが、そのときに文献の検索方法というコマを入れて、図書館の人に来てもらって説明をしてきてもらっている。授業のどこかの１コマ、学部の先生がやっているところに入り込んでいって、図書館の利用の仕方や統計のことなどを説明していただくと、もう少し膨らむと思う。使い方を知らない学生も結構いるのかと思う。

【学情センターの職員の方から】ガイダンスに関しては１回生から大学院生まで、ほぼすべての学部で、ここ数年で実施数が伸びている。職員１人が半期で50コマぐらいやっている状況である。学部によっては医学部のように段階別のプログラムを用意できるが、マンパワーが足りていないので、さらなる展開がなかなかできないことが悩みになっている。

６．まとめ

【金子】最初に鳥居先生のご講演を聞いて「すごい」の一言に尽きると思って、とても自分たちはできないと思ってしまったのだが、トップダウンは手っ取り早く見えるけれども、やはりボトムアップでやらないと参加意識がなくなってしまうので、時間はかかってもそれをやらんとしょうがないかなと思ったりしている。またざっくばらんな話として、鳥居先生が影響を受けた本という話をされたが、私も最近は結構本を読むので、全く授業とは関係ない内容でも、読んだ本の表紙を見せる。そうすると、何人かが食らいついてくる。私の趣味で選んだ本が多かったりするが、食らいついてくる学生がいると出してよかったなと思う。そういう本を通じた学生とのかかわりもいいかなと思いました。

【荒井】学情センター利用者アンケート調査に関しては、職員さんの中でワーキンググループが作成されていて、私はここに着任してすぐかかわらせていただく機会を得た。職員さんのお話をいろいろ聞いているが、職員さんの方も学生への教育にどうやって貢献するのかを必死に考えているということが良く分かった。そういった職員さんの方の努力を、教職連携といった形で生かしていけたら良いと思う。

【司会】初年次教育関連の議論では、「図書館の使い方を学ぶ」ということを学習の到達目標に入れるのかどうかが議論になることがあり、そういうときには「文系はこうだが、理系はこうだ」という議論になりがちだが、荒井先生のご報告を伺うと、文系と理系の違いとは言い切れない学生の行動パターンがあるようで、興味深かった。

「医学部のカリキュラムは国家試験もあるのでがっちり決まっている」というイメージだったが、金子先生のご報告を聞き、JACMEなどの対応に取り組みつつも、学生に学んでもらうためにどうするかということを草の根的に考えていきながら、ボトムアップとトップダウンをうまく組み合わせておられることがわかった。

これらの取組みの経緯を全学に広げて考えたときにも、いろんな方向の議論の流れのところに、教学IR、データを使って状況を把握し、それを共有していく体制づくりについて、考えられる課題は本学としても多いのかなと思いながら聞かせていただいていた。